一般演題

1. 甲状腺中毒症の ^{131}I 治療成績

内村　文昭　　佐藤　幸雄
（山形県立中央病院・放）

山形県立中央病院では，昭和42年より甲状腺中毒症の患者に ^{131}I 治療を施行している．

今回，過去18年の治療成績を総括した．

対象数は145例で，年齢別では30歳代から50歳代までに多く，男女比では1:2.6であった．

^{131}I 治療のみでの機能正常例は121例(83.5%)，機能亢進例18例(12.4%)，機能低下例6例(4.1%)であった．^{131}I 1回投与例は129例(89%)であった．

機能低下例は吸収線量が60 Gy以上特に70 Gy以上での発現が多く，機能亢進例は50 Gy以下での発現が多く認められた．

経過観察年数による晩発性甲状腺機能低下例は，今回の統計上認めず，さらに追跡調査が必要であることを述べた．

また ^{131}I 投与後の癌化症例のないことを追加した．

2. 当院における甲状腺機能亢進症の Na ^{131}I 治療の検討

畠山　隆　　竹下　元（市立函館病院・放）
鎌田紀美男　　篠崎　達世　　（弘前大・放）

Na ^{131}I 治療を行った甲状腺機能亢進症19例につき臨床的検討を行った．対象は男4名，女15名で，男女比は1:3.8であり，年齢は40代の女性が過半数を占めた．

経過観察期間は2年以上が16例(84.2%)，5年以上が4例(21.2%)であった．

Na ^{131}I 治療回数は1回が13例(68.5%)，他の6例(31.5%)は2回投与であり，治療線量としては初回5,000 rad，2回目以後は3,000～5,000 radであった．

1回投与群では4年目にて全例が機能の正常化をみとめた．19例全体での現在(昭和60年5月)の成績は機能正常12例(63.2%)，機能亢進6例(31.6%)，機能低下1例(5.3%)である．

3. I-131 MIBG の使用経験

丸岡　伸　　中村　護　　（東北大・放）

1984年5月から1985年5月までに褐色細胞腫が疑われた18例に対し，I-131 MIBG シンチグラフィを施行した．うち褐色細胞腫と確診されたのは7例で，内訳は副腎褐色細胞腫3例，副腎外褐色細胞腫1例，Sipple症候群2例，悪性褐色細胞腫1例で，Sipple症候群の1例を除く6例はその後手術を施行され，摘出腫瘍の重さは17–324 g平均145 gで，Sipple症候群の甲状腺髄様癌の大きさは6×5 mmと小さかった．褐色細胞腫は7例全例で良好に描出され，悪性褐色細胞腫の骨転移巣にも異常集積を認めた．Sipple症候群例では褐色細胞腫の描出は良好であったが，髄様癌は描出されず，腫瘍の大きさが一つの問題であったと思われた．褐色細胞腫例では2日目以降で心臓への集積の強いものはなく，中條らの報告と一致した．Backgroundの低下する2日目ないし3日目の像が診断に適していた．

4. ^{131}I-MIBG が転移巣検出に有用であった神経芽細胞腫の一例

星　宏治　　木村　和衛　　（福島医大・放）
戸川　貴史　　鈴木　晃　　（同・核）

症例は4歳の女児．左副腎の腫瘤摘除後の経過観察中であった患者である．尿中HVA，血中LDHの再上昇，CRPの陽性化等から神経芽細胞腫の再発・転移の出現が疑われ，^{131}I-MIBG シンチグラフィが行われた．その結果，^{131}I-MIBGシンチグラフィは，神経芽細胞腫の転移巣検出に際し，きわめて有用な検査法であると考えられたので報告した．

Presented by Medical*Online